

# 石巻市放課後児童クラブの震災復興

門間 一也

宮城県石巻市福祉部子育て支援課

## 石巻市の概要

石巻市は宮城県東部に位置し、面積は五五六平方キロメートル。震災前の人口は約一六万三〇〇〇人(平成二十四年(二〇一二年)四月現在、約一五万二〇〇〇人)の、県下第二の規模の都市です。古くから水産業が盛んで、石巻工業港が開港してからは、工業都市としても発展してきた街であります。

石巻市の放課後児童クラブは、学校留守家庭児童保育事業として昭和五二年(一九七七年)四月一日にスタートし、公設公営が二六か所、公設民営が二か所の、計二八か所で開設しており、震災以前は、指導員は八〇名、利用児童数は、約八八〇名でありました。

## 放課後児童クラブの再開

震災による放課後児童クラブの被害

状況は、全壊が二か所、床上浸水が七か所ありました。床下浸水や一部損壊を含めると、一三か所となります。

震災後、平成三年(二〇一一年)四月二一日から小学校が再開することになり、放課後児童クラブも小学校にあわせて開設する方針で復旧工事を進めていきました。また、全壊した放課後児童クラブは他のクラブと合同で開設することとし、五月九日にすべての放課後児童クラブを再開し、七四五名の子どもたちが利用することになりました。

再開するにあたって、やむを得ずに数名の方が退職されましたが、七五名の指導員が続けてくれて、非常に心強かったです。その中には、避難所やろうじて残った自宅の二階で生活している方、遠く離れたところに避難し、通勤時間に一時間近くかかる方などがおり、自分自身が大変な状況にあるにもかかわらず、子どもたちのために

んばろうとする姿勢は、頼もしいものであります。

## 復興に向けて

放課後児童クラブの再開の方針が決まり、復旧工事等を進めていましたが、ひとつ、気がかりなことがありました。それは、子どもたちや指導員の心のケア、いわゆる「心の復興」であります。

私自身、そうしたノウハウはなく、とまどいがありました。震災直後から、避難所で子どもたちの広場設置等、子どもたちとの関わりをもっていただいた公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンとの出会いがあったことで、活路を見出すことができました。被災して失った、放課後児童クラブの備品提供のほかに、私が悩んでいた「子どもたちや指導員の心の復興」についてもサポートをしていただけた

いうことで、私はすぐに協働を進めていくことを決めました。

心のケアの具体的な内容は、夏季休業期間を利用した「科学実験」や「アフリカンドラム」等の出前講座をはじめ、休日を利用し、親子一緒に参加する「キーキバイキング」や「映画鑑賞会」等の交流イベントが開催されました。

また、震災により心に傷を負った子どもたちに対するきめ細やかな保育の実現のため、セーブ・ザ・チルドレンと全国学童保育連絡協議会(宮城県学童保育緊急支援プロジェクト)の協力で、放課後児童クラブの支え手である指導員のさらなるスキルアップをめざし、講義型と実践型の指導員研修会を合わせて六回、開催しました。また、研修会終了後には、指導員の心のケアの一環として、昼食をとりながらの情報交流会も実施いたしました。その他にも、全国学童

保育連絡協議会主催の宮城県学童保育講座参加のためのバス支援等をしていただいております。

このような充実した支援を実施することができたのは、セーブ・ザ・チルドレンをはじめ、全国学童保育連絡協議会のご支援のおかげであり、心から感謝しております。

子どもたちには、少しずつ笑顔が戻り、震災以前のにぎやかさが少しずつ戻りつつあるように感じられますし、そうした笑顔が指導員の活力となり、仕事に対する意識向上や自信が生まれ、できていくように感じます。

## 子どもたちの安全のために

平成二十四年二月に指導員の発案で作成が始まった「石巻市放課後児童クラブ防災・防犯に関する基本指針」が、四月に完成しました。以前のマニュアルでは対応できなかったことも多く、

「震災を経験した今だからこそ、子どもを守るマニュアルが作成できるものではない」という思いから作成をスタートさせました。

全指導員が参加しての「情報共有と課題抽出」、指導員が六グループに分かれての「課題整理と解決策案」、そして「基本指針作成」と三回に分けて、指導員中心に作り上げてきました。現在は、この基本指針をもとに、学校側等と協議を行い、放課後児童クラブごとにマニュアルを作成しております。

作成過程で、「情報共有」を行う際に見えてきたものもあります。震災の混乱の最中、避難所等に子ども居場所がないことにいち早く気づき、その環境をつくり、保護を行ったのは、放課後児童クラブの指導員です。自分たちも被災している中で、避難所にいる子どもたちのことを考えて、子どもに一番近い距離にいたことに感動いたしました。

した。

その一方で、残念なことに、学校側と放課後児童クラブの連携が取れず、子どものために何もできず、くやしい経験をした指導員もあり、放課後児童クラブの運営にあたっては、学校との連携が重要であるとあらためて感じさせられました。

### これからの 放課後児童クラブ

私自身、放課後児童クラブを担当して常に考えていることがあります。私が小学生の頃、自分の周りにはこうした制度はありませんでした。制度がなくても、安心・安全な居場所を子ども自身や地域の大人たちがつくり、地域の子どものは地域で守っていたからです。

時代の経過とともに、地域交流が希薄となり、地域の仕組みが崩れ、子どもたちを守る制度がなければ安心・安

全が確保できない時代になってきました。そうした時代だからこそ、放課後児童クラブは大変重要なもので、学校でも家庭でもない「第三の居場所」として、放課後児童クラブに求められるものは大きく、それに応えていかなくはなりません。そのためには、指導員、そして子どもたち自身によって放課後児童クラブを創り上げていくことにより、今まで以上に発展していくものだと考えております。

\* \* \*

今日も、指導員八〇名と利用児童八五三名は笑顔にあふれた放課後児童クラブで生活しております。

最後に、全国・全世界からのあたたかいご支援により、復興への一歩を踏み出すことができましたこと、厚く御礼を申し上げます。

ありがとうございました。